



2019年12月に武漢から全世界に広まったCOVID-19感染症も既に2年が経過し、我が国では第1波を皮切りに最近の第5波までを経験しました。大阪府内では一時期新型コロナ病床が満杯で、経過観察中に重症化して亡くなる患者も出て、社会問題化しました。当センターは重症急性呼吸器症候群(SARS)、新型インフルエンザ、エボラ出血熱、中東呼吸器症候群(MERS)等の新興感染症の封じ込めを担う、国内に4つしかない特定感染症指定医療機関であり、新興感染症の防波堤という重責を担っています。COVID-19感染者の診療についても、初期の段階から関空検疫経由の外国人旅行者の診療に当たり、2020年3月からPCR、LAMP、抗原定性・定量、抗体検査等を全国に先駆けて導入し、院内感染やクラスター防止対策を行ってきました。更に、総合内科・感染症内科の倭部長を中心に、大阪府や近隣地域から重症・中等症の患者や外国人患者、COVID-19肺炎や疑い患者を多数受け入れ、他病院では受け入れ困難な透析患者や関西空港検疫経由の外国人患者の受け入れも行ってきました。その結果、泉州地域住民の命を守るための最後の砦として頑張っていることが多くの報道でも評価され、当センターは全国的にも有名な病院の1つとなりました。

しかしながら、COVID-19患者受け入れによる病院負担は極めて大きく、コロナ専用病床を作って重症患者や中等症患者を受け入れる必要があり、看護師の配置も考慮して病床数を制限してコロナ対応を行わざるを得ず、国・大阪府からの補助金で補填しても収益の大きな落ち込みには追いつかないという現実がありました。更に、新型コロナウイルス患者を受け入れることで、風評被害による受診患者減少も経験する中で、何とかCOVID-19出現以前の診療体制まで戻すために、病院職員が一丸となって尽力することができました。この2年に亘ってCOVID-19に対する先の見えない戦いが続い



てきましたが、国内でもワクチン接種が進み、レムデシビル・デキサメタゾン・ロナプリーブ・パリシチニブなどの、注射薬・中和抗体カクテル療法・経口薬等に加えて経口抗ウイルス薬の有効性も示されています。一方で、感染力が強く世界中を席巻しつつある新たなオミクロン株も最近同定され、全世界で新型コロナ患者が再度激増している現状に加え、国内にも入ってきている状況は今後も予断を許しません。

昨年4月に腎臓内科、血液内科、脳神経内科、循環器内科、心臓血管外科に新たに部長級の医師を迎え、スタッフも相当充実させることができました。ハード面では最新のMRIを導入するとともに、老朽化した院内施設の改修も順次行ってきました。救急外来は改修して診療ベッドを増床し、COVID-19疑い患者も含む種々の新興感染症患者への対応として、陰圧室を2室にまで増床し、より安全にまたより機能的に対応できるようにしました。登録医の先生方をはじめとする地域の医師会、歯科医師会、薬剤師会の医療関係者、また多職種介護関係者、行政機関の方々、多方面の皆様方のお力添えを頂きながら、今後も泉州地域の中核病院としての当院の果たすべき役割を全うしていきたい所存です。

理事長 山下 静也



感染症専門医より ~地域の方へおねがい~

日頃より感染対策にご留意いただき誠にありがとうございます。

大阪府では年末年始よりじわじわと新型コロナウイルス感染症の患者数が増加してきております。新たな変異株であるオミクロン株による市中感染が広がりを見せ、高齢者施設や学校などでのクラスターが発生しております。皆様方におかれましては引き続き、3密回避、換気、マスクの正しい着用、手指衛生の徹底、並びに医学的にワクチン接種可能な方におかれましては、2回接種では効果が低いため3回接種をお願い致します。

オミクロン株ではこれまでのデルタ株の約4倍の感染力があります。ワクチン接種の有無に関わらず、発熱、上気道症状などが認められましたら、まずお近くの医療機関にご連絡いただいた上で紹介受診いただき、早期診断ならびに早期治療につなげていただくとともに、感染拡大抑制にご協力いただけましたら幸いです。今後、オミクロン株による感染者数が増えてきますと、ワクチン非接種者、基礎疾患のある方や高齢者にも感染が広がり、重症者が増加することが予想されます。よろしくお願ひ申し上げます。

感染症センター長 兼 総合内科・感染症内科部長 倭 正也
兼 院内感染対策室長 兼 産業医